

# 3 漢方薬

## 1. 漢方薬とは？

1874（明治7）年、日本政府は国として医療制度を普及させるために医制を布告し、医師、歯科医師などを資格制とした。その後、日本の医療は西洋の医学を取り入れ、世界的に発展し現在に到っている。そのなかにあつて、紆余曲折こそあつたが、日本の伝統医学である漢方医学は、現在すべての大学の医学部で授業カリキュラムが組まれ、漢方教育が行われている。

漢方医学の治療で用いられる漢方薬は、植物、動物、鉱物などの生薬を組み合わせた合剤である。漢方薬には、医師が処方する医療用漢方製剤と、薬局で購入できる一般用漢方製剤がある。

日本の漢方薬の特徴の一つは、医療用漢方製剤に保険適用が認められているということである。医療用漢方製剤はすべて、厚生労働省によって承認された原材料をもとに作られている。さらに、製品の安全性や品質管理は製造・販売会社によって厳しく保証されている。一方で、一般用漢方製剤は保険適用とはなっていない。しかし、一般用漢方製剤も厚生労働省によって承認された原材料を用い、製品の安全性や品質管理は製造・販売会社によって厳しく保証されたものであることには変わりはない。

この他、漢方薬の原材料として使われている薬草、鉱物などを使い「漢方」と称し販売されている健康食品、サプリメントの類があるが、これらは漢方薬ではない。効果の有無については、購入した個人の自己判断に委ねられているのが現状である。同様に、インターネットや並行輸入で入手した海外の「漢方」（実は漢方薬といえるものは日本の製品のみであり、「中国の漢方薬」というものはない）は、安全性や品質管理が保証されているものではない。

## 2. 漢方薬を用いた臨床試験

医師は、例えばがん診療においては、抗がん剤の副作用軽減を目的として、さらに患者の生活の質（QOL）の向上を目的として、漢方薬を使用している。現在の傾向として、漢方薬は、言い伝えや経験による使用方法に加え、基礎研究やエビデンスに則った、漢方薬の作用機序を理解したうえでの処方および使用が増えてきている。がん患者が、安全に安心して漢方薬を使用できるように、毎年、多くのエビデンスに基づいた漢方薬の研究結果が発表されている。特に漢方薬は、西洋医学では治療方法がない場合の補完ということで、西洋薬では効果が得られない部分を補っていることが多い。実際、表8のように多くのがん治療の現場で漢方薬が用いられている。

## 3. 漢方薬の注意点

漢方薬は自然のものでできているので副作用はないという誤解が多く見受けられる。

表8 がん治療時に用いられる漢方薬

漢方薬	愁訴・合併症など
大建中湯（だいけんちゅうとう）	腸閉塞，術後腸管運動麻痺
牛車腎気丸（ごしゃじんきがん）	リンパ浮腫
六君子湯（りっくんしとう）	胃がん術後の逆流性食道炎
半夏瀉心湯（はんげしゃしんとう）	抗がん剤（イリノテカン塩酸塩）による下痢
芍薬甘草湯（しゃくやくかんぞうとう）	抗がん剤（パクリタキセル）による筋肉痛・関節痛
十全大補湯（じゅうぜんたいほうとう）	進行乳がんの化学療法＋ホルモン療法における併用による生存率改善
補中益気湯（ほちゅうえききとう）	胃がんと大腸がんの手術侵襲の軽減

〔日本東洋医学会，漢方治療エビデンスレポート2013<sup>1)</sup>より作成〕

表9 代表的な生薬および漢方薬の副作用等

生薬	副作用
大黄（だいおう），芒硝（ぼうしょう）	腹痛，下痢など
麻黄（まおう）	動悸，血圧上昇など
甘草（かんぞう）	浮腫，血圧上昇など
附子（ぶし）	動悸，血圧上昇など
生薬	相互作用
石膏（せっこう），牡蠣（ぼれい），竜骨（りゅうこつ）	ニューキノロン系抗菌薬
大黄（だいおう），牡丹皮（ぼたんび），芍薬（しゃくやく），桂皮（けいひ）	鉄剤，酵素剤
生薬および漢方薬	併用禁忌
甘草（かんぞう）	アルドステロン症の患者 ミオパシーがある患者 低カリウム血症のある患者
小柴胡湯（しょうさいこうとう）	インターフェロン製剤を投与中の患者 肝硬変，肝がんの患者 慢性肝炎における肝機能障害で血小板数が 10万/mm <sup>3</sup> 以下の患者

〔北島政樹 監，今津嘉宏 編，がん漢方，南山堂，2012，pp176-184<sup>2)</sup>より作成〕

漢方薬も薬効を有する生薬でできているため当然副作用もあり，さらに，他の薬との相互作用も認められる。表9に代表的な生薬および漢方薬の副作用を示す。

以上のように，漢方薬は近年エビデンスも認められ，西洋薬では対応できない症状の改善に用いられてきている。作用機序や副作用を考えたいうでの漢方薬の使用は，これからの重要なポイントとなると考えられる。

（今津嘉宏，上園保仁）

## 【文献】

- 1) 日本東洋医学会，漢方治療エビデンスレポート2013—402のRCT（EKAT 2013）.  
<http://www.jsom.or.jp/medical/ebm/er/index.html>
- 2) 北島政樹 監，今津嘉宏 編，がん漢方，南山堂，2012，pp176-184